

DENSEN SHINBUN

インタビュー 新社長 に聞く



古河電工業業電線
白坂有生社長

にサポートしていきたい。また、当社と昭和電線CS双方の製造拠点の特長などを發揮し、効率的かつ最適な生産が図れるように協力する。

最近、事業再編などを実施されていることもあり、まず御社の概要から伺いたい。

「当社の事業は、汎用線事業(建敷3品種など)と、機能線事業(キャブタイヤ、EMILMF C、機器配線用電線、極薄肉被覆電線、TVカメラ用光複合ケーブル、鉄道・信号及び車両用電線、船用電線など)の二つがある。

汎用線事業の新たな展開として、当社親会社の古河電工と昭和電線ホールディングスは、建敷電線3品種(IV、CV、CCV)などを扱うSFCC社(出資比率:昭和電線HD60%、古河電工40%)を設立し、20年4月から業務を開始した。こうしたなか、『SFCCブランド』において、当社はSFCC社を強力

古河電工業業電線の白坂有生・新社長は「19FYは売上高270億円(前年度並み)、営業増益(前年度比約50%増)となり、好調な機能線事業が牽引した。20FYはコロナ禍で先が読みにくい、下期の挽回に期待し、売上高210億円(同約3割減)、純損益で黒字を確保したい」とした。機能線事業について「長年取り組んできた差別化製品を一つでも多く開花させたい。また、コロナ禍の中でデジタルマーケティングを進め、サブコンなどを軸に、約2千人にメルマガ配信で『らくらくアルミケーブルオンライン説明会』の参加者を募集し、2回の開催で延べ1000人以上が参加した。今後も、メルマガ配信やオンライン、オフラインでの研修会などは継続する予定」と述べた。

二つ目は、全社員が一枚岩になって安全、安心に働けるような環境整備や人づくりを推進するとともに、全社員にとってやりがいのある会社になりたい。

三つ目は、新製品の開発を推進することだ。例えば、18年から上市しているケースもある。いず

また、ほかには、育ててきた製品の芽が出て、九州工場の煩悩が続いているケースもある。いず

機能線を重視、下期挽回に期待

メルマガ集客 アルミケーブル研修会

きた新製品『らくらくアルミケーブル』の需要が動き出した。古河電工が自動車分野で培ったアルミ電線ケーブルの技術などを活用して開発したのが『らくらくアルミケーブル』。お客様から、柔らかく、軽く、敷設しやすいと評価され、採用例が増加し、出荷は2年間で100件を上回った。

「当然、手洗い実施、マスク着用、さらにソーシャルディスタンスの維持に加えて、テレワーク

延べ100人以上が参加している。またメルマガを通じて参加者を募り、コロナに充分留意した上で、当社平塚工場内の研修センターで『らくらくアルミケーブル』の研修会を実施した。今後とも、こうしたメルマガ配信やオンライン、オフラインでの研修会などは継続する予定である。

一方、製造面では3工場(平塚、栃木、九州)北九州市門司区)体制になった。

「当社には長い歴史のなか、古くからのお客様も多く、そうした方々に支えられてきた。つまりお客様が最も大事であり、お客様第一主義で取り組む。とりわけメーカーである以上、品質とサービスの向上に一層力を注

場の稼働率は様々であり、平塚と栃木工場が下降したものの、九州工場が繁忙だ。稼働率が低下した平塚と栃木工場は生産ソフトの変更などで凌いでいる」

と機能線事業への取り組みは？

「汎用線事業は今後、量的に大きな伸びは期待できず、市場情勢に適切に対応した工場運営を行う。ただ、品質やサービスの向上を注ぎたい。同時に、古河電工グループの研究開発力やマーケティング力を活かしながら、カスタムメイド製品、提案型製品、付加価値製品開発を推進する」

